

# リアル 「実情会計」を先導する「心情会計」過程

高 寺 貞 男

市場が不合理性を一掃するかもしれないという多くの  
経済学者の初期の印象は大いに楽観的であった。

—Mullainathan and Thaler, p. 3.

## I 会計上の保守主義の転位先

周知のように、「期間利益の決定は〔利益の発生過程の〕不確実性を処理しなければならない」（Gellein, p. 61.）ので、そうした「不確実性に対する反応として、歴史的に費用と損失の認識に対してよりも収益と利得の認識に対してよりきびしい要求が課されてきた」（Basu, p. 9.）。その意味で、「会計のもっとも古く、おそらくもっとも普及した〔ために、もっとも影響力のある〕評価原則は保守主義である」と解釈されている。

なお、「近年、このルールは非難されるにいたった」（Sterling, p. 110.）が、「保守主義はその後〔弱まるどころか、逆に〕強まった」（Basu, p. 34.）といわれている。

では、会計上の保守主義はどこにどのように転位して、強められたのか。その行方と態様を探るために、以下、本稿においては、最近20年間に行動経済学が新しい分野として研究開発してきた「心情会計の諸問題」（Thaler, p. 183. 用語法に関して注記すると、2002年度のノーベル経済学賞をジョージ・メイソン大学のヴァーノン・スミスと一緒に受賞したプリンストン大学のダニエル・カーネマンと1996年に亡くなった彼の同僚・友人アモス・トヴェルスキーは1981年に「<sup>レギスラー</sup>通常の会計」を意味する「<sup>リアル</sup>実情会計」の対極に位置する活動を指

すために「心理勘定 (psychological account → 独訳 geistig Konten)」という用語を当てていたが、彼らも1984年になるとコーネル大学 (現在シカゴ大学) のリチャード・H・ターラーがすでに1980年に使っていた「心情会計 (mental accounting → 独訳 mentale Buchführung)」を「ベターな用語と勧めている」(Thaler, p. 185n.) ので、ここではそれにしたがっている。) のうちで<sup>フオスベクト</sup>見越し理論の価値関数 (を構成する利得関数と損失関数) の非対称性に新解釈を加えることによって、「保守主義に対する動機づけ」(Antle and Lambert, p. 374.) または保守主義の「心理的基礎」(Chambers, p. 92.) を投資家 (会計情報の最終利用者) と彼らに同調せざるをえない経営者 (会計情報の作成者兼自己利用者) の間に「共通信念」(Vanderschraaf, p. 1.) として成立する「相互主観的合意」(Sterling, p. 129.) に求めるアプローチを通じて、利益「平準化と〔保守主義を集中的に動員する〕ビッグ・バスの<sup>サイクル</sup>循環」(Sunder, 1997, p. 75.) が顕在化する過程を心情会計によって先導される実情会計の動態として追跡したい。

あらためて指摘するまでもなく、株式会社会計の「公開は経営者と投資家の間に〔相互主観的〕共通知識〔または相手の行動に関する相互期待〕を創出する手段である」(Sunder, 2002, p. 175.) が、その前提条件として入り子構造に注目した本稿によって、投資家と彼らに同調する経営者の間に成立する相互主観的「共通知識〔または相手の行動に関する相互〕期待が〔企業〕文化の構成要素〔である株式会社会計〕の必要かつ十分な条件である」(Sunder, 2002, p. 182.) という「相互共通理解または背景知識」(Vanderschraaf, p. 1.) を広め、かつ深めるのに少しでも貢献できれば、幸いである。

## II 心情会計における利得関数と損失関数の非対称性

かなり前から、新古典派経済学はそれに固有の「帝国主義的拡大原理」(Hirshleifer, p. 53.) にそって実証会計学の基礎理論になっているが、その体系構成の中核に位置する市場を経済生活に合理性を浸透させる場とみなし、そ

こにおける行動を選択（決定）する主体として合理的な<sup>ホモ・エコノミカス</sup>経済人を想定している。

しかし、市場は経済生活から（人間的限界を特徴づける）不合理性を一掃できないので、そうした事実を踏まえて、新古典派経済学が想定している「合理的な〔経済〕人に対する破壊的な攻撃は〔進化〕心理学の〔新しい研究〕動向からやってきた」（Hirshleifer, p. 59.）。たとえば、「心理学と経済学の結合」を目指している「行動経済学」（Mullainathan and Thaler, p. 2.）においては、新古典派経済学に挑戦したジョン・メイナード・ケインズ（1883-1946）やフリードリッヒ・アウグスト・フォン・ハイエク（1899-1992）にならって、市場における行動を選択（決定）する主体として（「合理的な愚か者」<sup>ラシヨナル・フール</sup>）症候群にかかっている合理的な経済人に代わる）不合理な常人を想定している。

そして、「心情会計過程」を行動「選択」過程であると理解していたカーネマンとトヴェルスキーにつぐ第二世代として人間「行動を観測し、〔そこから人間行動を支配している〕ルールを推理する」ことによって、行動「選択の心理学についてわれわれの理解を増進する」（Thaler, p. 184.）研究をリードしてきたリチャード・H・ターラーは「人々はいかに心情会計活動に従事しているかに関するわれわれの知識の現状」（Thaler, p. 183.）を概説した<sup>サーヴェー</sup>調査論文を『行動的意思決定誌』の1999年9月号に発表している。

よって、まずはじめに、そこに記述されている（家計とは区別される）企業の管理会計を先導する心情会計過程に注目すると、「人々がゆくゆくは埋没<sup>サンク</sup>原価<sup>コスト</sup>を無視する」事例として、「Gourville と Soman [1998年] は〔1年に2度会費を徴収する〕ヘルス・クラブへの出席（状況）が会費が支払われた月にもっとも高く、その後の5ヶ月間には低くなるが、結局、次の請求書がきた時に再び急増するということを発見している」。

かかる埋没原価または「前支出（prior expenditures）の〔行動選択〕関連性の〔当初は〕ゆるやか〔で、やがて急速な〕減少は……『〔前〕払い〔急速〕減価』と呼ばれている」（Thaler, p. 191.）が、そのことは埋没原価の行動選択

に対する非関連性が心情会計過程においてヒューリスティックにとらえられているということを意味している。

つぎに、企業の財務会計を先導している心情会計過程に注目すると、カーネマンとトヴェルスキー（1979年）の「見越し理論（prospect theory → 独訳 Erwartungstheorie）の価値関数（value function）は……心情会計の本質的要素を表現する3つの重要な特徴をもっている」（Thaler, p. 185.）。

- (1) 価値関数は（人が物事の認識や評価をする際の基準となる）なんらかの参照点（some reference point）と比較した<sup>ゲインズ</sup>利得と<sup>ロスズ</sup>損失（の増加に対するプラスとマイナス価値の増分）をもって定義される。
- (2) 価値関数（を構成する利得関数と損失関数）は（利得または損失の増加に対するプラスまたはマイナスの価値の増分が次第に小さくなっていく）感応度逓減（diminishing sensitivity）を示す。つまり、物事の認識や評価が参照点を離れれば離れるほど、鈍くなるということを感じ度逓減と呼んでいるわけである。

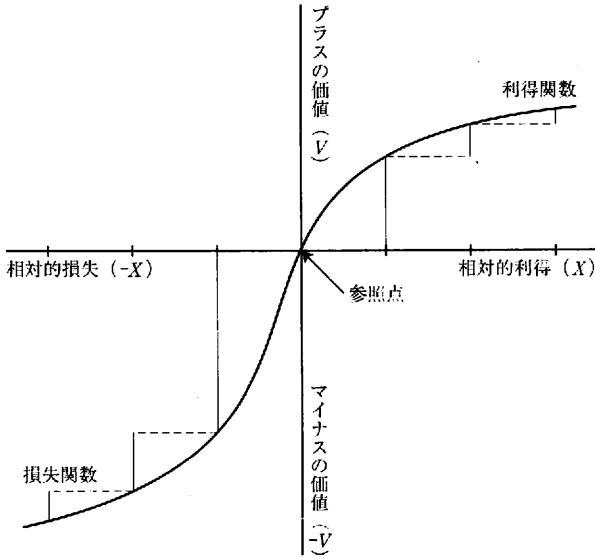
以上の説明をグラフ化すると、第1表に図示したように、利得関数は<sup>コンケイヴ</sup>凹（くぼんだ型）に、損失関数は<sup>コンフェックス</sup>凸（ふくれた型）に、両者を合成した価値関数はS字型になる。

- (3) その場合に、損失は同額の利得よりも大きく感じられ、評価される（ $V(X) < -V(-X)$ ）ので、人々は損失回避（loss aversion）に走るという考えを取り入れた結果、「損失関数は利得関数よりも急勾配である」（Mullainathan and Thaler, p. 6.）。

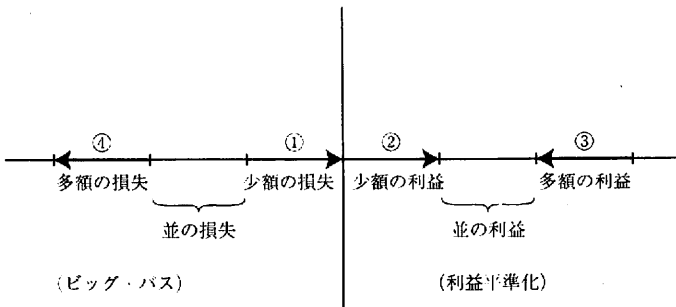
### III 心情会計過程によって先導される実情会計

以上考察した利得関数とは「非対処的な損失関数」（Antile and Lambert, p. 382.）があらわしているように、「損失は〔会計情報の最終〕利用者〔である投資家〕によって利得よりも過度に感じられる」（Antile and Lambert, p. 374.）ばかりではなく、同じ損失でも、「実現損失は<sup>ペーパー</sup>帳簿上の〔未実現〕損失よりも多

第1表 見越し理論の価値関数



第2表 利益平準化とビッグ・バスの循環的共存



くの [心の] 痛みをとまなう」と考えられる。

そこで、「人々は価値の低下した有価証券を売却することに気が進まない」はずであると直観した「Odean [1998年] は [大割引仲買企業の取引データを用いて] 投資家が価値の低下した株式よりも価値の増加した株式を売却すると

いうことを発見している」(Thaler, p. 189.)。

以上のような心情会計上の発見はしばしば心情会計の追随者となる実情会計にそのまま妥当する。

その意味で、「『赤』[字]を計上して勘定を締め切ることを嫌う他の証拠は実情会計の世界に屈する」(Thaler, p. 190.)が、すでに指摘したように、損失は投資家によって利得よりも過度に感じられるので、少額の損失が存在する場合には、第2表に①として図示したように、少額の損失の少額の利益への転化がまず最初に手がけられるに相違ない。

ただし、少額の損失があらかじめ存在しない場合には、第2表に②として図示したように、少額の利益の並の利益への引き上げが最初におこなわれるはずである。

事実、「少額の損失が少額の利益へ転化される」(Thaler, p. 190.)か、または「少額の利益の〔並の利益への〕増加……の頻度が著しく高い」(Burgstahler and Dichev, p. 101.)ことが発見されている。

たしかに、バーグスターラーとディチェフの調査結果は「絶対的・相対的損失に対する回避を主張する」「見越し理論の予測に一致している」(Burgstahler and Dichev, p. 124.)。しかし、彼らの調査結果は「ある意味では相補し合い、別の意味では相反する」(Sunder, 1997, p. 75.)利益平準化とビッグ・バスの循環的共存を完全に見逃している。

では、どうすれば、視野を広げて、「『ビッグ・バス』と利益平準化が……〔循環的に〕共存〔する要件を構成〕できるか」(Kirschenheiter and Melumad, p. 761.)。

筆者の考えでは、クリーン・サープラス関係が保持されるかぎり、ある会計期間における利益引き上げ（または引き下げ）は他の会計期間における利益引き下げ（または引き上げ）をともなう以上、（時間が経過するにつれて、見越し理論の価値関数を表示するS字型は微妙に変形しながら、左右にシフトするが、その程度はわずかなので、無視すると）第2表に②として図示した少額の

利益の並の利益への引き上げと③として図示した多額の利益の並の利益への引き下げは連動するので、組み合わせると、そこに利益平準化という会計行動が成立する。

これに対し、第2表に①として図示した（不況期の始まりに多用される）少額の損失の少額の利益への転化の有無とは独立して、④として図示した（不況期に終止符を打つために活用される）並の損失を多額の損失へ引き下げるビッグ・バスという会計行動が成立する。

事実、利益平準化においては、「多額の利益は（次年度に再び増やすために）[並の利益のレベルまで] 切り詰められる」のに対し、少額の利益は並の利益へ引き上げられる。そして、（不況期に終止符を打つために活用される）ビッグ・バスにおいては、「並の損失は [多額の利益のレベルにまで] いくぶん膨らまされる」(Thaler, p. 190.)。

もちろん、（不況期の始まりに多用される）少額の損失の少額の利益への転化がすでにおこなわれている場合には、並の損失を多額の損失へ引き下げるビッグ・バスを通じて、利益平準化が達成されるので、「利益管理の2つのありうるパターン」(Zucca and Campbell, p. 35.) として「利益平準化といわゆる『ビッグ・バス』は同じコインの2つの側面である」(Sunder, 1997, p. 74.) といってよい。しかし、そうでない場合には、（不況期に終止符を打つために活用される）ビッグ・バスは次年度以降における利益増加をもたらすので、それが不況期から脱出を助長することは間違いない。

#### IV 保守主義が集中的に動員されるビッグ・バス

保守主義のルールを再検討したカール・トマス・ディヴァインも強調しているように、「保守主義の意味を〔最初から〕利益決定という狭い分野に限定する必要はない」(Devine, pp. 129-130.) ので、保守主義の意味を会計情報の最終「利用者〔である投資家〕の損失関数の非対称性に対する〔会計情報の作成者兼自己利用者である経営者または〕会計管理者の〔重み付けされた複雑な心

理的] 反応」(Antile and Lambert, p. 374.) に求めると、すでに考察した心情会計によって先導されている実情会計の諸事例が示しているように、「明らかに、企業〔の経営者または会計管理者〕は株主（または潜在的株主）が見越し理論と一致する仕方で利益公表に反応すると信じている」(Thaler, p. 190.) と理解される。

そこで、そうした見方にそって会計上の保守主義の消長をたどってみると、「保守主義の一般原則の派生物」として「原価ルール」(Devine, p. 114.) が形成されて以来、「歴史的・実現ルール」(Devine, p. 112.) を中核にして体系化された発生基準会計が社会的に容認されるにつれて、保守主義の原則は会計理論（体系内に納めきれない）体系外のルールとして残置するか、会社関係者間の公平性を保証できないルールとして廃棄するかが選ばれる羽目になるが、やがて到来する（不況期に終わりを告げる）ビッグ・バスの際に、（不況期からの脱出に好都合な市価（時価）会計を代表する）減損会計という形で、「経営者が将来に関する期待を改善し、業績が測定されるベンチマークを低くする」(Elliott and Show, p. 98.) ことを狙って、集中的に動員されるルールとして復活すると理解される。

#### 参考文献

- Antile, Rick, and Richard A. Lambert, "Accountants' Loss Functions and Induced Preferences for Conservatism" in: Gerald A. Feltham, Amin H. Amershi and William T. Ziemba (eds.), *Economic Analysis of Information and Contracts: Essays in Honor of John E. Butterworth*, Kluwer Academic Publishers, 1988.
- Basu, Sudipta, "The Conservatism Principle and the Asymmetric Timeliness of Earnings," *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 24, No. 1, December 1997.
- Burgstahler, David, and Ilia Dichev, "Earnings Management to Avoid Earning Decreases and Losses," *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 24, No. 1, December 1997.
- Chambers, R. J., *Foundations of Accounting*, Deakin University Press, 1991.
- Devine, Carl Thomas, "The Rule of Conservatism Reexamined," *Journal of Account-*



- ting Research*, Vol. 1, No. 2, Autumn 1962.
- Elliott, John A., and Wayne H. Show, "Write-Offs as Accounting Procedures to Manage Perceptions," *Journal of Accounting Research*, Vol. 26, Supplement, 1988.
- Gellein, Oscar S., "Periodic Earnings: Income? or Indication?," *Accounting Horizon*, Vol. 1, No. 2, June 1987.
- Hirshleifer, Jack, "The Expanding Domain of Economics," *The American Economic Review*, Vol. 75, No. 6, December 1985.
- Kirschenheiter, Michael, and Nahum D. Melumad, "Can 'Big Bath' and Earnings Smoothing Coexist as Equilibrium Financial Strategies?," *Journal of Accounting Research*, Vol. 40, No. 3, June 2002.
- Mullainathan, Sendi, and Richard Thaler, "Behavioral Economics," *Working Paper 00-27*, Department of Economics, Massachusetts Institute of Technology, September 2000.
- Sterling, Robert R., "Conservatism: The Fundamental Principle of Valuation in Traditional Accounting," *Abacus*, Vol. 3, No. 2, December 1967.
- Sunder, Shyam, *Theory of Accounting and Control*, South-Western College Publishing, 1997.
- "Management Control, Expectations, Common Knowledge, and Culture," *Journal of Management Accounting Research*, Vol. 14, 2002.
- Thaler, Richard H., "Mental Accounting Matters," *Journal of Behavioral Decision Making*, Vol. 12, No. 3, September 1999.
- Vanderschraaf, Peter, "Common Knowledge" in: *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, 2001. (Available at: <http://plato.stanford.edu/entries/common-knowledge/>)
- Zucca, Linda J., and David R. Campbell, "A Closer Look at Discretionary Writedowns of Impaired Assets," *Accounting Horizon*, Vol. 6, No. 3, September 1992.